

JOMA 通信

Japan Overseas Missions Association

海外宣教連絡協力会

公報 NO.52号

21世紀の青年伝道・世界青年宣教大会

日本福音同盟総主事 具志堅 聖

イエスは彼ら（弟子たち）をじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」（マタイ 19：26）

「子供たちや青年が教会に少なくなった」という叫びが諸教会で多く聞かれる。教会形成という視点から観察すると、1960 - 80年代の頃と今日の彼らの教会における出席率は著しく変わった。大変賑やかであった教会学校から子供の声が消えつつある。なぜそのように急激に減少してきたのか。日本福音同盟（JEA）では、第3回～5回宣教推進会議（2000 - 2002）にかけて『21世紀の宣教の課題』という主題のもと、直接的または間接的にその原因に関する研究を重ねてきた。

その中で浮き彫りにされてきた問題点や課題は決して容易なものではない。今日の圧倒的な世俗文化の情報の流入によって造られた歪んだ人間観。教会文化に触れる接点の欠如による遊離。青少年問題の複雑化とそれに対する適切な対応の遅れ。これまでの教授法（方法論）の具体的見直しの遅れなどが話題となった。



そこで宣教の業を委ねられている私たち教会がまず悔い改めて、信仰をもって課題に対処するための[発想の転換]や[方法論の見直し]に取り組む。その際、子供や青年たちの目線を大切に受けとめながら、聖書的世界観を継承していくことが一つの大切な視点として見いだされてきているのである（第4回、第5回JEA宣教推進会議・決意表明を参照）。

さて、青年伝道というテーマは今日非常に重く感じる。痛みを感じると述べるべきであろう。そこで上記の御言葉が心

に響いてくる。ある時、主イエスは金持ちの青年との対話を通じて、「金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです」と語られた。まるでその言葉は、「この豊かな時代に生きる青年が信仰をもって神の国と神の義を求めていくことは難しいことである」と言われているに等しいと思える。「それでは誰が救われるのでしょうか」。私たちも同じ問いを胸に抱く。けれども、そんな私たちに、主イエスは「しかし、神にはどんなことでもできます」という励ましを送ってくださるお方であることを心に刻むべきであろう。

今年の夏（2003年8月12日～15日）に東京・青山学院において、世界宣教青年大会（SSST）が開催される。日本全国のキリスト者青年たちが一同に会して、神の言葉を通してキリストの福音に触れる。そして、主の前に新しく自分自身と私たちが生きる世界を見つめ直し、それぞれに与えられている宣教の場に遣わされていくことを目的とした大会である。青年たちが生きる世界に対して聖書的理解を得るための分科会、さまざまな出会いを体験できる分科会、また宣教に携わっておられる方々による分科会や展示などが計画されている。まさに21世紀を生きる青年たちが、自ら自主的にどのように生き抜いていくかを模索する時、どのように宣教の働きを担っていくかを協議する場、そして共に励まし合い交友の輪（ネットワーク）を形成する機会にもなるであろう。この時代精神に相対して進んでいくという現代の宣教のチャレンジは確かに大きい。しかし主のお約束と大いなる御業を信じ、期待して前進しようではないか。主にある将来は常に輝いていることを共に思い描き続けよう。■



CSKの働きについて

小山田 格
（聖書同盟・伝道部）

CSKとは「中学生聖書クラブ協力会」のローマ字略です。教会が行なう中学生伝道に協力する働きで、次のような目的を持っています。

1. 中学生に、キリストを宣べ伝えて、主の救いに導く。
2. 中学生が毎日の聖書通読の習慣を身に付けられるように手助けする。
3. 信仰を持った中学生が、成長したキリスト者となるよう訓練する。

このような目的を達成するために、具体的には以下のような諸活動を行っています。

① 中学生の聖書通読運動

主に、中学生の年代から使えるような聖書日課誌「月刊ジュニアみことばの光」を発行しています。その特徴は、

- － 5年間で聖書の全巻を読むように計画されている。
- － 聖書の解説と共に、実生活に当てはめられるような、適用としての質問や、祈りのことばが書かれている。
- － 中学生の興味を惹くように、イラスト、クイズ、読み物などが工夫されている。

② 中高生のためのキャンプ

中学生のためのCSKキャンプは、CSKのスタートと同じ年に始まり、今も中心的な活動です。特徴は「教会主体」で、趣旨に賛同した教会が集まり、協力して、自分たちで企画運営に当たります。毎年参加教会のスタッフが、話し合い、祈りあって教会にとって有意義なキャンプを行なうことを目指して

いるのです。CSKは後援という立場でお手伝いをさせていただいています。また、OBたちによる高校生のためのキャンプもあります。

- ③ 中学科教師のための研修、および中学生伝道に関する情報の提供年1回、講師をお招きしての中学科教師研修会を開催し、また教会の要望があれば、主事を派遣して、各教会で研修の時を持っています。また「CSKフォーラム」(季刊で発行)というニュースレターや、研修会での講演をまとめたフロッピーディスクを必要な方にお分けしています。

- ④ 世界のスクリプチャーユニオン(SU)との協力
聖書同盟・CSKは、世界のSUとの協力関係にあります。SU東アジア地区が主催する3～4年に1度の東アジア地区国際青少年キャンプに参加しています。

日本ホーリネス教団 の青年と世界宣教

郷家 一二三
(宣教局国外宣教 坂戸キリスト教会)

日本ホーリネス教団では、台湾の活水泉教会の働きに木下理恵子宣教師を、フィリピンのダバオにエノブレ悦子宣教師を、マレーシアの世界福音主義学生連盟に劉義枝宣教師を派遣している。

加えてこの一年は感謝なことに宣教師が次々に起こされようとしている。ブラジル、東アジア、オーストラリアにむけての準備が始まっている。宣教師に限らず、宣教地に出て行って協力する信徒も起こされている。今後の教団における世界宣教の展開が楽しみである。在日の外

国の方々への伝道、海外の日本人伝道、これらが一つのものとして国内外で展開することを祈っている。

2003年12月のUrbana03には、日本ホーリネス教団挙げての参加を呼びかけている。前回の大会に参加した青年から献身者が起こされた。今回も神様が働いてくださると信じている。

九州教区では韓国との青年交流がさかんである。アジアホーリネス連盟のパイプを通じて、韓国・台湾・日本の絆を太くしたいし、ブラジル・北米・日本のホーリネス教団の交わりも深めて、青年の交流を促進したい。交流とは共に伝道し、宣教について語り合うことである。これにまさる交流はない。青年を送りだし、青年を迎える教団・教会でありたい。

2004年には日本ホーリネス教団の全国青年宣教大会(仮称)を若手の牧師・信徒で計画している。どんな大会になるのかは今後のたのしみだが、自分たちでやろうとすることが何よりもうれしい。そのような動きを大切にしたい。

長期ビジョンに立った 短期宣教プログラム

ジェネレーションX: 新世代の若者の心を
いかに世界宣教に向けさせるか

酒井 信也 (OM日本)

1) 人間関係を重視

彼らはチームプレーが得意です。単独で困難に立ち向かっていく「ローンレンジャー」ではなく、仕事よりも人間関係

の中に充足を見出すのです。OMの短期宣教プログラムに参加した522人の若者を対象にしたアンケートでは、80%近くが一人で宣教するよりはチームで活動する方を選ぶと答えています。短期宣教チームに参加することで宣教地での人間関係、ネットワークが築かれ、新世代の若者にとって長期宣教に向かう決心をしやすいのです。彼らがよくとる態度は「もしあなたが一緒に行ってくれるなら、私も行きます。」というものです。短期宣教で訪れた宣教地で、自分と同じような人々が生涯を宣教に捧げているのに出会う時、

自分もまた長期宣教師として帰ってこようという決断を促すのです。パンフレットに書かれた宣伝を見ただけで生涯を宣教師として捧げようと献身する時代は、過去のものとなっています。現代の若者は、誰と一緒に、どんな状況に飛び込んでいくのかを見極めようとします。それがわかって初めて、彼らは生涯をかけた決断をすることができるのです。

2) 新しいことを受け入れる

新しいことを受け入れることに関しては、古い世代は新しい世代の若者にはありません。彼らは知らないところに旅行したり、自分と違う分化を体験したり、新しい言葉を習うことにオープンです。短期宣教プログラムはこのような新世代の若者に対して、一生を捧げるにふさわしい働きに出合わせる絶好のチャンスです。

3) 献身に対する注意深さ

ある27歳の若者はこのことに関して次のように言いました。「僕の世代の人たちは、一生を左右するような決断がなかなかできないように思う。誰かを盲目的に信頼するなんてことはしたくないからね。でも、自分に合う居場所を見つけた時、それに自分を賭けようとする気持ちは他の世代の人より強いと思う。

特に、何か責任を任せられたり、決断を下すような役割をもらうとその気持ちは強くなるんだ。」この世代は水に飛び込む前にまずその水を調べてみないと飛び込めないと考えるのです。短期宣教プログラムは、若者の宣教に対する主にをだんだんと押し上げていくおので、今後新しい働き人を生み出していく鍵となるでしょう。

アンテオケ宣教会の活動

大田 裕作 (国内主事)

当宣教会では若者への宣教啓蒙活動として以下のようなものが挙げられます。

1. 世界宣教セミナー

94年より関東地区を中心に7月の中旬、3泊4日で行なわれてきました。毎回主たるテーマや地域が揚げられ、主講師から専門的知識や情報また洞察が取り次がれるとともに、宣教会のスタッフや理事、また帰国中の宣教師がそれぞれの専門分野や経験を分かち合ってきました。参加者は宣教師志願者、関心を持つ人、実際に派遣に関わっている支え手为中心でした。この参加者の中から確実に宣教地への道を辿っていく器が起されてきました。このセミナーは7回を数えた後、2001年は宣教会設立25周年記念の「全国宣教大会ツアー」を挿んで昨2002年は第8回目のセミナーを初めて関西地区で開催し、出席者、反響、その後の宣教への繋がりなどが従来にも増して、主の恵みを受けました。テーマは「宣教の最後の砦へ」、講師はインドネシアでイスラムの中枢部(大学や寄宿学校)に招かれ、キリスト論を講じながら的確に福音を伝えている器、ヨセフ・ロニー師でした。その働きは文字通り立ちはだかる砦の向こう側に入りこんでの伝道で、日

本国内での伝道にも大切な示唆が隠されていると一同感じました。

2. 宣教地視察ツアー・異文化体験ツアー

青年たちが宣教地の実情を知り、良き理解者・支援者になることを願い、また異文化に接する中で宣教への召しを確認できるようにと、ほぼ毎年ツアーが企画されています。視察先はインドネシアをはじめ、ネパールやカンボジアなど近い将来五大陸へと広がっていくでしょう。昨2002年には中高生対象の異文化体験ツアーが実施され、非常に豊かな反響がありました。

3. その他各地宣教大会奉仕などが行なわれています。

青年と世界宣教

永井 敏夫

(日本ウイクリフ総主事)

若者にとって「世界」とは何だろうか？若者は何から「世界」を感じ取るのだろうか？サッカーやジャンプなどのワールドカップ、アメリカメジャーリーグやサッカーの外国クラブチームなどに代表されるようなスポーツに「世界」を感じ取る若者もいるだろう。また、ラップやゴスペルなどの音楽、映画やファッションから「世界」を見る者もいるだろう。

では、「世界」という時、「宣教」という言葉と結びつけて考える率はどれくらいだろうか？若者は、私たちが考えているほどには、両者を結びつけて考えていないのではないだろうか？

世界と宣教を結びつけようとしてきた今までの方策に、プラスするものがあるとすれば、それは、世界と宣教を結びつける前の段階のアプローチであるように

思う。宣教と言う視点で世界を見ていくことは、確かにこれからもずっと必要だし、チャレンジをしていくことも大切だ。とともに、若者たちの意識する「世界」を通して、「宣教」を見ていくという視点も持ちたい。好きなことはとことんやる若者たちのエネルギーは、宣教への情熱にもつながっていくはずだ。例えば、「世界で、自分の知っている選手や歌手のために祈ること」も、世界宣教であると思う。若者たちの興味・関心を窓口にして世界の情報を知らせることや、宣教への意欲を育てることを柔軟な心で考えられたらと願っている。従来の宣教地体験旅行や宣教デイナーなどの企画に加え、なんとか若者にビタミンを与えていく方策を探りたいと思っているこの頃である。

行こう！

見よう！

聞こう！

参加しよう！

体験しよう！

JEA 世界宣教青年大会

「SEND ME」

8月12日(火)～15日(金)

会場：青山学院講堂

2003年度版JOMA 世界宣教地図が完成しました !!

お待たせしました。新しく改定された世界宣教地図が完成しました。
JOMA加盟団体から派遣されている宣教師(88組)の写真入り。200円。
各フィールドに遣わされているお一人お一人を覚えてお祈りしましょう。

お問い合わせ・お申し込み

JOMA 事務局

TEL 045 - 891 - 7769

FAX 045 - 894 - 2121

新役員をご紹介します



小山田格師(会計)
平位全一師(会長)

清水幹雄兄(書記)
池原三善師(副会長)



坂庭裕子(事務局)

発行: 海外宣教連絡協力会
発行者: 平位 全一
住所: 244-0842
横浜市栄区飯島町2441-10
Tel.045-891-7769
Fax.045-894-2121
e-mail hongodaioffice@yahoo.co.jp
郵便振替: 海外宣教連絡協力会
00160-7-106631